

令和元年度「高校生ステップアップ・プログラム」

実 施 報 告 書

1 「高校生ステップアップ・プログラム」とは

P 1

2 各指定校の取組（19校）

道 央	空知	(1) 北海道夕張高等学校	P 2
		(2) 北海道砂川高等学校	P 3
	石狩	(3) 北海道札幌北高等学校（定時制）	P 4
		(4) 北海道札幌白陵高等学校	P 5
		(5) 北海道江別高等学校	P 6
		(6) 北海道有朋高等学校（定時制）	P 7
	後志	(7) 北海道岩内高等学校	P 8
道	胆振	(8) 北海道追分高等学校	P 9
		(9) 北海道鶴川高等学校	P 10
	日高	(10) 北海道浦河高等学校	P 11
南	渡島	(11) 北海道函館中部高等学校（定時制）	P 12
		(12) 北海道函館工業高等学校（定時制）	P 13
道	留萌	(13) 北海道苫前商業高等学校	P 14
北	宗谷	(14) 北海道稚内高等学校（定時制）	P 15
道 東	オホーツク	(15) 北海道網走桂陽高等学校	P 16
		(16) 北海道興部高等学校	P 17
	十勝	(17) 北海道本別高等学校	P 18
	釧路	(18) 北海道標茶高等学校	P 19
		(19) 北海道弟子屈高等学校	P 20

3 高校生ステップアップ・プログラム実施要項

P 21

「高校生ステップアップ・プログラム」とは

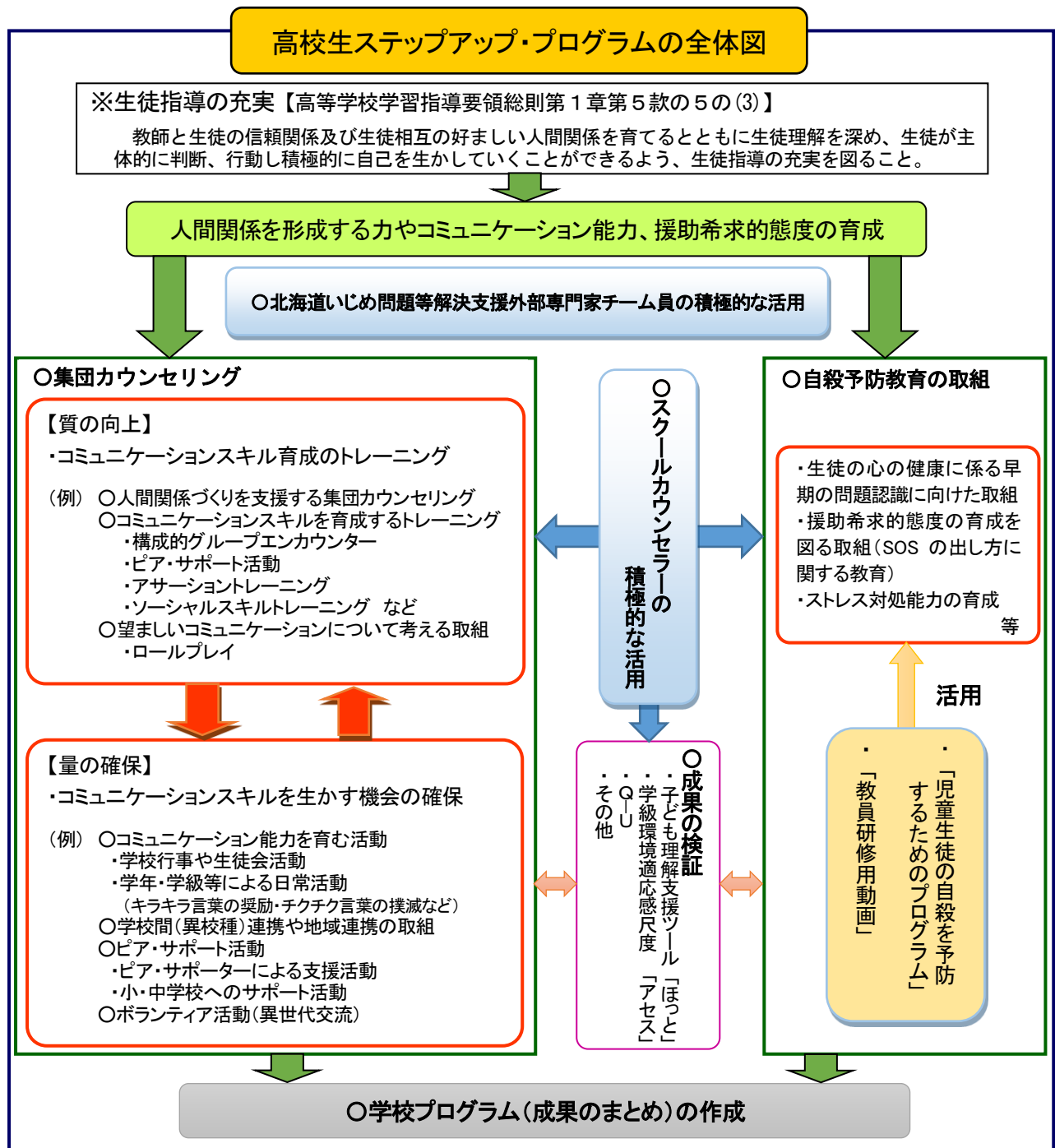
1 趣旨

高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

2 事業内容

- (1) 集団カウンセリングの実施
- (2) 自殺予防教育の取組の実施
- (3) 外部人材を活用した取組の実施
- (4) 成果の検証
- (5) 学校プログラムの作成



北海道夕張高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：65名

本校の目指す生徒像

- ・社会に通用する生徒
- ・主体的で自律的な生徒
- ・粘り強く努力する生徒
- ・チャレンジする生徒

本校の現状

小・中・高と固定化した人間関係で過ごす生徒が多いため関係修復能力が低い生徒が見られる。また、自尊感情が乏しく、自己表現に自信のない生徒も見られる。

本校の取組の特徴

1. 集団カウンセリング等を通してコミュニケーションスキルを習得し、人間関係を形成する力を育成する。
2. 自殺予防教育の取組により、ストレス対処能力を育成する。

取組の内容

○スクールカウンセラーによる集団カウンセリング

1. コミュニケーションスキルの習得

＜対 象＞ 1 学年 20名

＜内 容＞ 「椅子の座り方とコミュニケーション」

「大事な人」を手に入れるための手順を題材に、「人との関係と距離」について、5種類の座り方の体験を通して、座り方が人に与える印象の違いについて学んだ。

＜感想等＞

生徒からは「座り方を変えるだけで感じ方が変わることを実感した。」「座り方によってコミュニケーションの取りやすさが違う。」などの感想が上がっており、座り方で人に与える影響が違うことを実感した。

2. 自殺予防教育 ストレス対処能力の育成

＜対 象＞ 2 学年 26名

＜内 容＞ 「失敗のすすめ 人生のつまづきを恐れないために」

人生の中で「つまづく」ことは避けられないものであり、どのような「立ち上がり方」をするかに意味があるのだという内容の講話や、3つのストーリーを題材に「つまづき」から立ち上がるために必要な勇気ときっかけについて考える演習を行った。

＜感想等＞

生徒からは「人生の中でつまづくことがあっても、決して悪いことではないことが分かった。」「これからもつまづきながらも頑張りたい。」などの感想が上がっており、「つまづき」について前向きに捉えようとする視点を身に付けた。



取組の成果等

○ 成果

スクールカウンセラーによる集団カウンセリングを継続的に実施することにより、クラス内の人間関係が良好になり、各行事における学年間の対応にも思いやりの行動や発言が見られるようになった。また、スクールカウンセラーに対して気軽に接する雰囲気が醸成され、個別面談を受ける生徒も増え、自分の思いを表現することができるようになった。

○ 課題

集団カウンセリングの実施時間の確保が難しい学年もあるため、内容を精選して行うことやその成果を担任及び職員と共有することが必要である。

○ 次年度に向けて

年度末に集団カウンセリングの実施内容等を職員へ周知し、LHR等の年間計画に組み入れ、継続して実施する。

北海道砂川高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：284名

本校の目指す生徒像

- ・自ら考える力と学ぶ意欲を身につけ、自己実現を目指す人
- ・倫理観、公共心や思いやりの心を培い、地域に貢献しうる人
- ・自ら鍛える心を持ち、強健で気力ある人

本校の現状

- ・ストレス等により体調が悪化し、不登校傾向となる生徒が増加。
- ・SNS等を通じて、一部の生徒間で発生した人間関係の悪化が多数の生徒に広がり、状況改善が困難となるケースが見られる。

本校の取組の特徴

学校スローガン「人の心の痛みのわかる、ぬくもりのある人間になろう」のもと、自殺予防教育を行う。

1. いじめに対して、校内組織(いじめ防止対策委員会)を中心に、学校全体で取り組む。
2. 地域あるいは外部機関と連携した教育活動の中で、自他の生命を大切にし、支え合う心を育てる。
3. スクールカウンセラー講話を実施し、SNSの世界とは異なる、そばにいる友人の大切さを認識する。

取組の内容

○自殺予防教育の取組

1. 校内組織(いじめ防止対策委員会)を中心にした、学校全体での取組
生徒の心の問題に対して早期に対応できるよう、上記委員会を中心に、校内環境(相談体制の充実等)を整えらるとともに、既存の学校行事を自殺予防教育における「下地づくり」として、充実させる。
2. 地域や外部機関と連携した教育活動の中で、自他の生命を大切にし、支え合う心を育てる取組
 - ＜交通安全誓いの日＞
2015年6月6日、飲酒運転による事故で当時在籍していた本校2名の生徒が巻き込まれ、尊い命が犠牲となった。この事故を風化させることなく、ご家族とともに悲しみを胸に刻み、自他の生命を尊重し、生涯にわたり交通安全を誓う。(全年次対象)
 - ＜普通救命(脳卒中対応・防災対応)講習＞
医師、消防、介護福祉スタッフ等、専門家による講習を実施し、命の尊さについて認識を新たにす。(3年次対象)
 - ＜カトリック＞
年齢の近い大学生との対話を通じて、自己理解を深め、コミュニケーション能力を高める。(1年次対象)
3. スクールカウンセラー講話を実施し、SNSの世界とは異なる、そばにいる友人の大切さを認識させる取組
 - ＜目的＞
心の危機サインを知り、自分や友人の心身が不調な時の対応について考える。
 - ＜内容＞
 - ・中高生の自殺の実態を知る。
 - ・困っている人の相談にのる「ゲートキーパー」になろう。
 - ・依存症(薬物・アルコール・スマホゲーム等)と孤独の関係を理解する。
 - ・心の問題(気分障害、不安障害、ストレス関連障害等)について考える。
 - ＜実施後の生徒の声＞
 - ・一つ一つの言葉によって傷つき、深い闇をかかえることで、自殺につながっていくことが分かった。「言葉を大事に使おう。」と強く思った。

ゲートキーパーとは？

- ・悩みのある人に気づき、
- ・声をかけ、
- ・話を聞いて、
- ・必要な支援につなげ、
- ・見守る人のこと

取組の成果等

○ 成果

校内組織(いじめ防止対策委員会)の業務内容と関連させてプログラムを実施したことにより、年次・分掌・関連教科との連携を深めることができた。また、生徒理解の重要性について共通認識をもち、教員間で役割分担しながら、計画的・継続的に生徒を支援する体制を確立することができた。

○ 課題

SNSを通じた生徒間のトラブルは早期の発見が難しく、教員が生徒から相談を受けた時点で、多くの生徒を巻き込み、状況が複雑化していることが多かった。特に、いじめへと発展するケースでは、被害生徒は、SNSと現実の双方で苦しんでいることが多く、教員はこのような背景を踏まえきめ細かな対応が必要である。

○ 次年度に向けて

ホームルーム担任によるLHRや外部講師によるケータイ安全教室等、様々な機会を通じてSNSの使い方や注意点等について生徒に対して継続的に指導し、スマホ等の使用方法を改善させる。また、苦しんでいる生徒を孤立させることなく、複数の教員で状況を把握し、適切な対応ができるよう教育相談体制を強化する。

北海道札幌北高等学校

課 程：定時制
学 科：普通科
生徒数：153名

本校の目指す生徒像

- ・自発的、主体的に努力する生徒
- ・豊かな人間性と社会性を持った生徒
- ・自ら未来を切り拓くことができる生徒

本校の現状

- ・生徒のコミュニケーション能力と社会性の育成が必要である。
- ・心の健康教育の充実に向けた校内環境の整備が必要である。
- ・特別支援教育に関する教職員のスキルアップが必要である。

本校の取組の特徴

1. スクールカウンセラー等を活用した生徒のコミュニケーション能力と社会性の育成
2. 外部人材を活用した教職員のスキルアップ

取組の内容

- スクールカウンセラー等を活用した生徒のコミュニケーション能力と社会性の育成
 1. コミュニケーション能力の育成
4月26日（金）にコミュニケーションスキル講座としてキャリアガイダンスを含め、生徒のコミュニケーションスキル向上のための講座を実施した。
 2. スクールカウンセラーによる支援
5月～2月にかけてカウンセラーによる個別のカウンセリング・悉皆面談を実施した。
 3. 自殺予防教育の取組
 - (1) カウンセラーによる講話「望ましい人間関係の確立について」
 - (2) 心身の発達と心の健康（保健体育「ストレス対処能力、及び、援助希求的態度の育成」）
 - (3) カウンセラーによる講座「生徒と教師が共にコミュニケーション能力を高めるために」
 - (4) ソーシャルスキルトレーニング「援助希求的態度の育成」
 - (5) ブレーンストーミング「ストレス対処能力、及び、援助希求的態度の育成」
 - (6) カウンセラーによる事例研修会「心の教育」
- 外部人材を活用した教職員のスキルアップ
 1. 北海道札幌稲穂高等支援学校やいじめ問題等解決支援外部専門家チームによる教員研修
専門家を招いて事例研究を実施し、教職員のスキルアップを図った。

取組の成果等

- 成果
 1. 日常生活等への満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証）
「ほっと」を活用して、生徒本人の自己分析の結果と教員から見た生徒像とを重ね合わせることで、生徒一人一人の特徴をより正確に把握することができ、生徒指導に関わる有益な情報となった。
 2. 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容
全職員が共通理解のもと、生徒指導や教育相談を充実させたことにより、生徒は落ち着いた学校生活を送るようになり、不登校生徒数や中途退学の生徒数も減少した。
- 課題
 1. 対話的な授業による授業改善と生徒の基礎学力向上が必要である。
 2. 教職員の特別支援教育への理解と合理的配慮の実践が必要である。
 3. 特別支援教育に関する校内研修の計画的な実施と研修への参加促進、成果の共有が必要である。
- 次年度に向けて
次年度も入学時の予防教育に重点を置き、第1学年を中心に「ほっと」の活用を図り、分析後の担任による面談及び教員間の情報の共有等に生かしていきたい。

北海道札幌白陵高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：382名

本校の目指す生徒像

- ・自分の良さを伸ばせる生徒
- ・規範意識や思いやりのある生徒
- ・目標に向かって努力する生徒

本校の現状

複雑な家庭環境等多様な課題を抱えている生徒や社会性・コミュニケーション能力が身に付いていない生徒が見受けられる

本校の取組の特徴

地域と連携した活動への参加を通して、コミュニケーション能力を育成するとともに、自己肯定感及び自己有用感の向上を図る。

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1. 「環境整備事業（ボランティア活動）」

町内会担当者の指導・助言を受けながら、校舎付近及び通学路の環境整備作業を実施した。1回目は2年次生による花壇の花苗植え、2回目は3年次生による花壇の除草、3回目は1年次生によるゴミ拾い及び花壇の後片付けを実施した。

事業終了後、生徒からは、「暑かったけど、通学路をきれいにすることができたし、作業をしながらいろいろな話ができ楽しかった」等の感想があった。



【環境整備事業の様子】

2. 「地域防災訓練への参加」

1年次生139名が、白石区防災訓練に参加し、地域住民とともに、消火訓練、搬送訓練、土のう積み体験等を行った。生徒の防災意識を高めることと、地域の人々と触れ合うことで、コミュニケーション能力を高め自己肯定感や自己有用感を培うことをねらいとして実施した。

生徒は「いつ災害が起こっても慌てずに行動できるようにしたいし、避難する際にはお互いが声を掛け合い助け合うことが大事だということを改めて感じた」と話していた。



【地域防災訓練の様子】

取組の成果等

○ 成果

活動を通して、生徒が、参加者の方々から感謝の言葉や笑顔をもらうことにより、自己肯定感や自己有用感を高めることができた。また、積極的に活動する生徒が増えた。

○ 課題

地域と連携した様々な活動に生徒が主体となって取り組むことができるよう、綿密な計画を立てることが必要である。

○ 次年度に向けて

学校行事や地域と連携した取組において、多くの生徒が活躍できる場面を設定し成功体験を積ませることにより、人間関係を形成する力やコミュニケーション能力のより一層の育成を図る。

北海道江別高等学校

課 程：全日制

学 科：普通科・事務情報科・生活デザイン科

生徒数：867名

本校の目指す生徒像

自他を尊重し人間力を高め、課題解決に向けた行動力と創造力を培う。

本校の現状

対人関係においては、周囲に配慮するあまり、自己開示することに消極的な生徒も見られる。

本校の取組の特徴

1. ピア・サポート研修会の実施
2. 保健講話の実施

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1. ピア・サポート研修会の実施

他者理解や人間関係形成能力の育成を目的として、ピア・サポート研修会を定期的に行っている。スクールカウンセラーが講師となり、保健局員を中心に生徒が主体的に参加している。

スクールカウンセラーからは、コミュニケーション能力の育成や人間関係の確立の在り方について指導していただいた。研修会に参加した生徒は、トラスト・ウォークを体験し、目の不自由な人の気持ちを理解したり、ロールプレイによって傾聴することを体験したり、呼吸法によるリラックスの方法を学んだ。

2. 保健講話の実施

新しい環境に緊張と不安を抱えがちな新入生に対して、スクールカウンセラーによる保健講話を実施した。参加した生徒は、思春期特有の心理的特徴について学ぶとともに、SNSを介した文字によるやり取りだけでなく、「音声としての言葉」で伝えることが大切であることを学んだ。

講演では、青年期の心の在り方、ストレスマネジメント、コミュニケーションスキル及びソーシャルスキル等の説明があり、新入生にとっては、心身ともに急激に変化する思春期・青年期を生きる自己について考える契機となった。



【トラスト・ウォークの様子】

取組の成果等

○ 成果

- ・ピア・サポート研修会の実施により、生徒のコミュニケーションスキルに向上が見られた。また、他者の気持ちを共感しようとする態度が見られるようになり、自他を尊重する内的な変化を実感する生徒が増えた。
- ・6月に第1学年全クラスを対象として実施したhyper-Q Uテストにおいて、学校生活への意欲に関して、友人・教師・学級いずれの関係も全国平均ポイントを上回り、学習・進路に関しても、全国平均よりも高い結果となった。学年団を中心に生徒への様々な支援やスクールカウンセラーによる保健講話が、一定の成果につながったものと考えている。

○ 課題

- ・ピア・サポート研修会については、全校生徒を対象とした取組までには至っていない。要因として、校内の様々な活動との兼ね合いのほか、スクールカウンセラーの勤務時間の確保が困難であることにある。今後、全校生徒を対象とした研修の実施ができるよう、関係分掌等と連携の上、校内における調整等を図る必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・ピア・サポート研修会を定期的に受講した生徒がピア・サポーターとなり、それまでに養った人間関係形成能力や他者理解力をさらに高めるとともに、学級又は学年単位によるピア・サポートを継続的に実施する。
- ・校内において本プログラムに対する教職員の理解が進んでいることから、心理学に興味のある生徒や進路内定後の第3学年の生徒に対し、担任等がピア・サポート研修会への参加を促すなど、研修内容のさらなる共有や還元を努めたい。

北海道有朋高等学校

課 程：定時制

学 科：普通科・事務情報科

生徒数：222名

本校の目指す生徒像（生徒指標）

- 1 自ら伸ばせ 輝かせ
- 2 心豊かに 気品あれ
- 3 進取で強く しなやかに

本校の現状

問題を抱え、不登校傾向のある生徒の保護者からスクールカウンセラーへの相談があるが、時間を十分に確保できない。

本校の取組の特徴

- 1 北海道医療大学心理科学部臨床心理学科の学生によるピア・サポート活動及び学習支援
- 2 スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

- 1 北海道医療大学心理科学部臨床心理学科の学生によるピア・サポート活動及び学習支援
北海道医療大学学生4名によるピア・サポート活動及び学習支援を実施した。
参加した生徒からは、「話を親身に聞いてもらえて良かった」「もっと回数が多ければ良かった」等の感想があった。
- 2 スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実
スクールカウンセラーによる個別カウンセリングを実施し、生徒・保護者の状況に応じた適切な支援を受けることができた。

取組の成果等

○ 成果

- ・北海道医療大学学生によるピア・サポート活動及び学習支援の実施により、コミュニケーション能力を向上させ、人間関係を構築する力を育成することの必要性を生徒に理解させることができた。
- ・スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの実施により、生徒・保護者が個々の状況に応じた適切な支援を受け、学校生活をより一層意欲的に送ることができるようになった。

○ 課題

- ・大学生によるピア・サポート活動及び学習支援について、次年度以降も継続して実施するための体制の構築が必要である。
- ・不登校傾向のある生徒の保護者や対人関係を構築できない生徒など、多様な問題を抱えた保護者及び生徒からのスクールカウンセラーへの相談希望が多くあるが、相談のための十分な時間を確保できないことから、相談体制の見直しが必要である。

○ 次年度に向けて

- ・大学とのより一層の連携を推進し、ピア・サポート活動及び学習支援の継続的な実施に向けた体制の構築を図る。
- ・スクールカウンセラーと連携を図り、生徒が安心して登校できるような校内環境の構築を、今後も推進する必要があることから、スクールカウンセラーの来校回数や面談時間を十分確保できるよう調整し、1人でも多くの生徒との面談ができるための時間を確保する。

北海道岩内高等学校

課 程：全日制
学 科：普通・事務情報科
生徒数：317名

本校の目指す生徒像

伝統や校風を重んじ、確かな学力やたくましく生きる力など知徳体のバランスが取れ、自らなすべきことを理解して努力できる生徒

本校の現状

人間関係の構築が苦手な生徒が見られ、ストレスへの適切な対応の仕方や発散方法について知識が不足している状況がある。

本校の取組の特徴

1. ピア・サポート活動やアサーショントレーニングを通してコミュニケーション能力を育成する。
2. ソーシャルスキルトレーニング（SST）を通して、良好な人間関係を構築するとともに、自殺予防に関して援助希求的態度について理解を深めるとともに、具体的な手法を身に付ける。

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1. 思春期教室（ピア・サポート活動等の実施）

3年生は社会人を、2年生は大学生を、1年生は卒業を控えた3年生を講師として行う対話型ワークショップを通して、講師の体験談を聞いたり、質問をしたりなどしてコミュニケーション能力の育成を図り、未来ビジョンを描くきっかけとした。



← 2年生思春期教室



3年生思春期教室→

2. 「T-time」（ソーシャルスキルトレーニング）

朝学習の10分間及び総合的な探究の時間の中で、ソーシャルスキルトレーニングを行った。



取組の成果等

○ 成果

これまで養護教諭が思春期教室を、特別支援委員会がソーシャルスキルトレーニングを担当していたが、今年度立ち上げた新分掌「キャリア推進部」が統括して担当することにより、多くの教員が生徒に関われる体制が整い、内容を充実させて実施することができた。

○ 課題

「T-time」の取組について、5分前登校を促している校内事情から朝学習の開始時間と登校時間に時間差があり、生徒全員で活動できない場合があるため、朝学習の開始時間と登校時間を合わせ、生徒全員で活動に取り組めるよう、校内体制の整備を図る必要がある。

○ 次年度に向けて

生徒のスキルアップに合わせ、生徒が他者とコミュニケーションを図る場面を多く設定するなどして、実施内容を段階的に深めていく予定である。

北海道追分高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：85名

本校の目指す生徒像

- ・ 主体的・協働的に学習に向かう生徒
- ・ 自律的に行動し、実践力のある生徒
- ・ 相手を尊重し、自分の意志を表現できる生徒

本校の現状

生徒の自己肯定感の向上及びコミュニケーション能力の育成のための継続的な取組が必要である。

本校の取組の特徴

1. 教科指導を通して、プレゼンテーション能力及びコミュニケーション能力を育成する。(集団カウンセリングの実施)
2. 異年齢集団との交流学习やボランティア活動を通して、生徒の自己有用感を向上させる。(集団カウンセリングの実施)
3. その他の取組
 - ・ 「生徒サポート委員会」を中心として、個々の生徒に対応した支援を充実させる。(外部人材を活用した取組の実施)
 - ・ リーダー研修において、要となる生徒のスキルアップを図り、リーダーによるピア・サポート活動を通じた温かい学級集団づくりを実現する。(外部人材を活用した取組の実施)
 - ・ 自殺予防教育プログラムの実施により、生徒に自殺予防についての正しい知識を身に付けさせ、援助希求の態度及びストレスに対処する能力を育成する。(自殺予防教育の取組の実施)

取組の内容

○ コミュニケーション能力や人間関係を形成する力の育成を図る取組

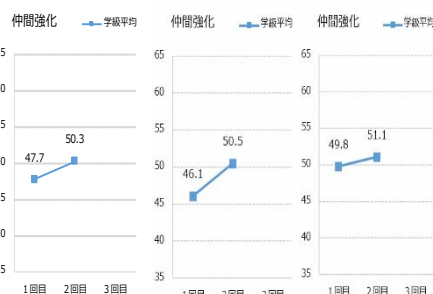
1. プレゼンテーション能力及びコミュニケーション力を育成する教科指導
教科「情報」や3年生の選択授業等でインターンシップ成果発表会、見学旅行報告会及び学習成果発表会を実施し、生徒のプレゼンテーション能力や自己表現力のほか、他学年への発表を通し、コミュニケーション能力の育成を図った。
2. 異年齢集団との交流学习、ボランティア活動
福祉施設での高齢者、幼児及び児童との交流会や、運動会やお祭り等のイベントでのボランティア活動における異年齢の方々との交流を通し、生徒の人間関係を形成する力及び自己有用感の向上を図った。



取組の成果等

○ 成果

プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を育成する教科指導、異年齢集団との交流学习やリーダー研修においてコミュニケーショントレーニングを実施した結果、子ども理解支援ツール「ほっとプラス」における4因子の「仲間強化」が全学年で上昇した。また、「hyper-Q U」や「ほっとプラス」の結果をもとに、スクールカウンセラーや担任による個別面談及び全生徒対象の教育相談を実施したことにより、「学校生活不満足群」にいた生徒の学校生活への意欲が向上した。スクールカウンセラーによる個別面談を3年間継続したことで、自己理解や気持ちの整理の仕方を学ぶ機会となった。



○ 課題

学級集団では、「仲間強化」の因子は上昇したものの、特定の人間関係に限られている傾向が見られるため、ソーシャルスキル向上に向けた継続的な支援が必要である。また、学級集団における人間関係の変化や学習理解については、学校生活への意欲に大きく影響するため、人間関係の変化に対応できる人間関係を形成する力及び自己有用感を育成する支援が必要である。

○ 次年度に向けて

引き続き、スクールカウンセラーによる集団カウンセリング及び個別面談を実施し、仲間意識の醸成と人間関係を維持するための力を向上させるためのコミュニケーション能力の育成を図る。

北海道鵒川高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：140名

本校の目指す生徒像

一人ひとりの個性を伸ばし、明るく豊かでたくましい人間を育成する。

本校の現状

近年は特に「対人関係が極端に苦手」及び「精神的に不安定な状態になりやすい」等、学校生活に不安を抱える生徒が多く入学してくる傾向がある。

本校の取組の特徴

1. 絵本セラピー等のCST（コミュニケーションスキル向上のためのトレーニング）や人間関係づくりを支援する取組を継続的に実施する。（集団カウンセリングの実施）
2. スクールカウンセラーによる個別カウンセリング、日常的な面談、全校生徒対象の教育相談を実施する。（外部人材を活用した取組の実施）

取組の内容

○ スクールカウンセラーによる支援

1. 絵本セラピーの実施

絵本セラピストの指導のもと、不登校や中途退学の未然防止のため、予防的・開発的な視点に基づき、全学年において、絵本を使用して自分の感情や考えを表現し、他者の感情や考えを受け入れる経験を通して、自己理解と他者を受容する態度の醸成を図った。生徒からは、「一人ひとりの考え方を尊重することが大切である。」「人とのつながりの重要性を知ることができた。」「周りの人だけではなく、自分自身も大切にしなければいけないと思った。」等の前向きな意見があがった。

2. 定期来訪時におけるカウンセリング

希望者や特別な支援を必要とする生徒、担任がカウンセリングの必要性を感じた生徒を中心として、スクールカウンセラーの定期来校にあわせてカウンセリングを実施し、校内での情報共有を図った。



取組の成果等

○ 成果

絵本セラピーのCSTやカウンセラーのカウンセリング等を実施することにより、生徒が他者への理解を深め、自己を受容する態度を育成することができた。

○ 課題

コミュニケーション能力の不足により、他者の気持ちに配慮した言動ができない生徒が多く、特別な支援を必要とする生徒も増加傾向にあるため、予防的・開発的な教育相談の視点から、CSTやピア・サポート活動等をより一層充実させる必要がある。

○ 次年度に向けて

3年間の系統的なCSTの内容を考えるとともに、スクールカウンセラーと連携して生徒の心のケアができる体制の構築を図る。また、教育相談結果を全教職員で共有するなど、引き続き生徒理解に努める。

北海道浦河高等学校

課 程：全日制
学 科：総合学科
生徒数：361名

本校の目指す生徒像

- ・主体的・協働的に探究し行動することができる
- ・多様性を認め、人間関係を形成することができる
- ・よく努力し、意欲的に物事に取り組むことができる

本校の現状

- ・素直な生徒が多く、与えられた課題等には意欲的に取り組むことができるが、自ら主体的に判断し、行動することを苦手とする傾向が見られる。

本校の取組の特徴

1. コミュニケーションスキルを育成するためのトレーニング
2. キャリア教育と連動させた人間関係形成力、コミュニケーション能力の育成を図る取組

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1. コミュニケーションスキルを育成するためのトレーニング

宿泊研修で1年次生徒全員（116名）がアサーションに関する講義を受けた。アサーティブコミュニケーションを体験し、他者との関わり方やチームの在り方について感想交流を行った。「体験的な活動を通して、他者との望ましいコミュニケーションの方法や関わり方等について理解が深まった」という生徒の感想が多く見られた。



【アドベンチャーラリー（屋内での活動）】



【アドベンチャーラリー（屋外での活動）】

2. キャリア教育と連動させた人間関係形成力、コミュニケーション能力の育成を図る取組

キャリア教育の一環として、学習支援ボランティアや福祉施設運営補助ボランティア等に参加し、幅広い年代や職種の方々との交流を通して、社会におけるマナーやコミュニケーションスキルについて体験的に学んだ。

取組の成果等

○ 成果

コミュニケーションスキルを体系的に学び、実践的に活用することにより、全ての年次においてソーシャルスキルを向上することができた。

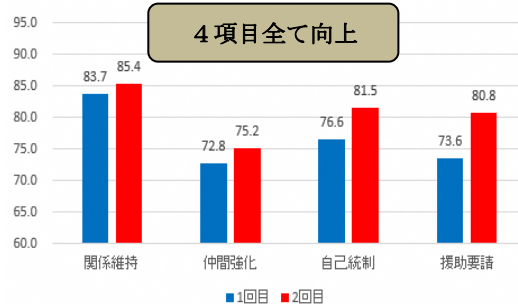
○ 課題

生徒間の関わり合いの強い学習活動や行事において、心理的葛藤や周囲への配慮不足が見られるため、全ての教育活動で、系統的な指導ができるよう、全教職員が取組内容及び活用方法等について理解を深め、組織的、継続的に本プログラムに取り組む体制づくりを進める必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・町内小中高連携協議会を中心とした連携の強化を図る。
- ・町教育委員会や関係機関と連携した取組の情報発信を行う。
- ・スクールカウンセラーを活用したコミュニケーショントレーニング方法の体系化を図る。

【「ほっと」ソーシャルスキル尺度の変化】



1回目 6月26日 2回目 11月6日実施

北海道函館中部高等学校

課 程：定時制
学 科：普通科
生徒数：55名

本校の目指す生徒像

- ・周囲を大切に、主体的に行動できる生徒
- ・他者を受け入れる寛容なこころを持つ生徒
- ・人の痛みがわかる生徒

本校の現状

- ・人間関係構築力が苦手な生徒が見られる。
- ・多様な問題を抱えている生徒が見られる。
- ・勇気を持って一歩進める自信のない生徒が見られる。

本校の取組の特徴

- ・中途退学の未然防止を主目的とする「中定プログラム」（平成27年度完成）を柱に実践している。
- ・平成30年度から援助希求的態度の育成、ストレス対処能力の育成を目指す自殺予防教育プログラムを導入した。
- ・本年度から自殺予防教育の取組として、心のエネルギーの使い方の講演・演習を実施した。
- ・全ての生徒と行う教育相談との内容の連携を図り、効果的な取組となるよう工夫している。

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

教育相談と連携して、スクールカウンセラーの指導による集団カウンセリングを実施した。事前に担任から情報提供を行い、担任及びスクールカウンセラーが生徒の活動の様子から、気付いたことを情報交換することにより、生徒指導、クラス経営の参考とすることができた。

○ 自殺予防教育プログラムの取組

本校では「心のエネルギー（命）の使い方～命の大切さ～」をテーマとして、心のエネルギーをどのように使うのかということや心のエネルギーの大切さについて講演などから学び、生徒は日々の学校生活において実践することができた。



（写真）講演会の様子

取組の成果等

○ 成果

- ・本取組が高校生活への強い決意を後押しする活動になっているため、中学校時まで不登校を経験した生徒も、粘り強く高校生活を送ることができた。また、部活動や学校祭などの行事にも積極的に参加できるようになった生徒も増加した。（学校適応力の向上）
- ・クラス内の人間関係の構築が次第にできるようになるとともに、自己の感情表現や自己表現ができる生徒も増加した。

○ 課題

- ・活動の内容によっては、それぞれの生徒が苦手としている部分が表面化することにより、グループ活動及びクラスの雰囲気が沈滞化してしまうことがあることから、生徒の特性を生かした活動の充実を図る必要がある。
- ・活動自体が複雑になると、活動を諦めてしまう生徒もいることから、クラス全体で互いに励ますことや、賞賛の意識を持続させることが大事である。
- ・グループワークでの役割・活動等の固定化を避けるため、互いに席を入れ替えることなどの配慮、注意深い観察が必要である。

○ 次年度に向けて

- ・本取組がスクールカウンセラー及び担当教諭任せにならないよう、実施方法について工夫するとともに、生徒が主体的に活動するための方策について検討する必要がある。

北海道函館工業高等学校

課 程：定時制
学 科：工業科
生徒数：41名

本校の目指す生徒像

- ・ 基本的な生活習慣が身に付き自立できる生徒
- ・ 勤労観や職業観を持ち主体的に社会に関わる生徒
- ・ 心身ともに健康でたくましく心優しい生徒

本校の現状

自己表現が苦手で人間関係に不安を抱えながら学校生活を過ごしている生徒が見られる。また、自己肯定感が低く、物事を否定的にとらえる傾向の生徒も見られる。

本校の取組の特徴

集団生活に適応できるようソーシャルスキルトレーニングなどを用いて人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るとともに、生徒にとって安心・安全なHRづくりを目指す。

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

- ・ ソーシャルスキル講演会

昨年度のスクールカウンセラー講演会実施後の生徒向けアンケートにおいて、「社会の中で普通に他人と交流しながら生活していくために必要な力を身に付けたい。」と希望している生徒が多かったことから、「ソーシャルスキルの知識を学び、演習を通して方法を実践していくこと」を目的として、北海道教育大学函館校の本田真大准教授を講師に迎えソーシャルスキル講演会を実施した。全校生徒を4名程度のグループに分け、自己紹介の後に、共感するスキルや主張性のスキルを高める取組について、人々の多様性を大切にする、違いをチャレンジとして楽しむことをテーマに実施した。

事後アンケートにおいては、「言葉って難しいと思いました。」「いろんな考え方がある中で、否定せず、共感、認めることが大事だと改めて思いました。」などの感想が得られた。

また、本講演会実施後に行われた体育大会においては、グループごとに練習するなどの様子も見られたことなどから、所期の目標を達成することができた。



(写真) ソーシャルスキル講演会

取組の成果等

○ 成果

講演会以外に、スクールカウンセラーを生徒に紹介するオリエンテーションを実施したことにより、生徒はスクールカウンセラーを身近に感じるとともに、生徒が積極的にスクールカウンセラーを利用するようになった。また、生徒の相談内容に合わせてスクールカウンセラーを選ぶことができたため、専門的な視点から、相談者にとって充実したカウンセリングを実施することができた。生徒も「利用してよかった。」という感想を述べていた。

○ 課題

生徒が積極的にスクールカウンセラーを利用したいとの希望があったが、時間に限りがあるため、すべての生徒の要望に応えることができなかったことから、相談体制を充実させる必要がある。

○ 次年度に向けて

今年度実施したスクールカウンセラーのオリエンテーションは、生徒とスクールカウンセラーをつなぐ意味において非常に有効であった。本校には不安を抱えて学校生活を送っている生徒が多く、安心・安全なHRづくりを目指し、スクールカウンセラーの活用以外についても生徒に寄り添う環境整備に努める。

北海道苫前商業高等学校

課 程：全日制
学 科：商業科
生徒数：24名

本校の目指す生徒像

- ・自ら考え、自ら学ぶ意欲と態度を育てる。
- ・健康で逞しい心身を育み、人間として調和のとれた生徒を育てる。
- ・地域の教育力を十分に生かしながら、望ましい勤労観や職業観を育てる。

本校の現状

- ・家庭環境等、介入が難しい課題を抱えている生徒が見られる。
- ・精神疾患や発達障がいについて教職員の研修が必要である。
- ・専門家と連携した強固なチーム支援を目指している。

本校の取組の特徴

1. スクールカウンセラーによる相談体制の強化及びチームによる支援体制の構築
2. 「心の健康教育」による自殺予防教育プログラムの実施

取組の内容

○ スクールカウンセラー（SC）による相談体制の強化及びチーム（SC、SSW、PT）による支援体制の構築

年度初めの全校集会において、全校生徒にSCを紹介し、生徒との交流の場面を設定したり、悉皆面談の他にもSCが校内を自由に歩いて生徒と自然に触れ合う場面を増やしたりするなど、生徒がSCに悩みを相談しやすくなるような工夫を図った。

また、SC及びスクールソーシャルワーカー（SSW）、特別支援学校の教員（PT）の来校日を同日に設定し、学校だけでは介入が難しい家庭環境の問題に対する効果的な働きかけや、保護者との面談、発達障がい等をもつ生徒の進路目標の設定、外部機関との連携等について、チーム全員が一堂に会して研修会とケース会議を行った。



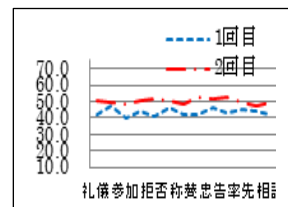
○ 「心の健康教育」による自殺予防教育プログラムの実施

本校においては、自殺予防教育という言葉は使用せず、「心の健康教育」として、生徒の実態を踏まえ、認知行動療法ワークブックを使った活動の追加や、担任との個人面談の充実などの工夫を図り実施した。また、生徒の特性等に配慮し、ホームルーム活動の年間指導計画に「ほっと」を位置付け、生徒の成長の様子を客観的に把握できるようにした。

取組の成果等

○ 成果

- ・SCと自然に触れ合うことができるよう工夫を図ったことにより、SCとの面談を希望する生徒が増加するなど、SCによる悉皆面談が本校の教育相談体制の1つとして定着した。
- ・チーム（SC、SSW、PT）での研修やケース会議を行うことにより、各教職員に気づきが生まれたり、事例検討の際に福祉の観点を取り入れたりするなど、チームによる支援の有用性を実感することができた。
- ・4月と12月に2回、「ほっと」を実施し、7つの要素において数値の向上が見られるなど、生徒の特徴及び変容を客観的に把握することができた。



○ 課題

- ・生徒の実態を踏まえた内容であることが必要なため、教職員全体で生徒の状況を踏まえながら、自殺予防教育プログラムを実施する必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・本校独自の「心の健康教育」等の取組内容を取りまとめ、冊子化することにより、各教職員が活用できるように整備する。

北海道稚内高等学校

課 程：定時制
学 科：普通科
生徒数：29名

本校の目指す生徒像

自立して、社会の発展に積極的に貢献していく生徒

本校の現状

義務教育段階における学習状況や生活状況に課題が見られる生徒がおり、本校は、地域における学びのセーフティーネットの役割を果たしている。

本校の取組の特徴

1. 人間関係形成能力の育成を目指した、地域と連携したボランティア活動の実施
2. 自他を尊重する心の醸成を目指した、「いのちに関する授業」の実施

取組の内容

○ 地域と連携したボランティア活動の実施

近隣町内会（3カ所）の「子ども会活動」において見守り活動を行い、地域の大人や子どもたちと交流した。また、稚内市社会福祉協議会と連携し、「赤い羽根共同募金」や「歳末たすけあい運動」のボランティア活動を行い、自己有用感を高めることができた。

○ 自殺予防教育「いのちに関する授業」の実施

誕生学アドバイザーを講師として、いのちの大切さについての講話を実施した。また、保健所と連携し、「赤ちゃんふれあい体験」を行い、地域のお母さんたちの協力を得て、実際に乳幼児と接し、いのちの大切さを実感することができた。



「見守り活動」



「歳末たすけあい運動」



「赤ちゃんふれあい体験」

取組の成果等

○ 成果

- ・地域と積極的に連携する中で、他者から頼られる経験や感謝される経験を重ねることにより、自己有用感が高まり、他者と積極的に関わる生徒が増えた。
- ・乳幼児とふれあい体験を通じて、いのちの大切さを再確認し、自他を尊ぶ気持ちを醸成することができた。

○ 課題

- ・生徒の自己肯定感や自己有用感を高める活動を継続的、組織的に実施する体制づくりを進める必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・特別支援教育の観点から、「小・中学校での支援の実際」など、生徒の生育環境を深く理解する研修を計画的に実施する。

北海道網走桂陽高等学校

課 程：全日制

学 科：普通・商業・事務情報

生徒数：410名

本校の目指す生徒像

- ・将来に向けた高い志を立て、知性を啓発し、自己を錬磨して人格の調和的形成に努め、社会の一員としての自覚と責任を持って、社会の発展に貢献する人間を育成する。

本校の現状

- ・学力の格差が大きく、支援を要する生徒が増えてきている。
- ・明るく素直な生徒が多い反面、人間関係の構築ができず、ストレスをため込む生徒も見られる。

本校の取組の特徴

1. 「hyper-Q U」などのアセスメントツールを活用した取組
2. P Tによる校内研修及びS Cによる支援連携を図り、個別の指導計画を作成
3. 自殺予防教育プログラムにおける命の大切さに係る教科横断型の教育活動

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1. 「hyper-Q U」などのアセスメントツールを活用した取組

「hyper-Q U（学級満足度）」・「ほっとプラス（考え直す力）」・「学校生活アンケート（学校独自）」などのアセスメントツールを活用した取組を実施し、生徒支援委員会（月1回実施）と連携しながら個々の特性や状況を把握して、支援に当たっている。

2. P Tによる校内研修及びS Cによる支援

発達障がいを抱えた生徒等の理解の深化を図るため、P Tを講師に招き、W I S C -IVの概要や具体的支援・演習等を行った。また、不登校、友人関係、発達障がい、家族関係等の様々な悩みを抱える生徒に対し、S Cによるカウンセリングを実施した。今年度は、不登校及び発達障がいに関する相談が多く、保護者に対するカウンセリングも行うことで家庭と連携することができた。支援が必要な生徒には、S Cによる支援連携を図り、個別の指導計画及び個別の教育支援計画を作成し教員間での共通理解を図った。なお、必要時にはS S T（ソーシャルスキルトレーニング）等を活用している。

3. 自殺予防教育プログラムにおける命の大切さに係る教科横断型の教育活動

いじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺予防を図るため、教員が全校生徒に向けて「命の大切さ」などを伝える「体育館HR」という取組を行っている。

4. その他

人間関係の構築が不得意な生徒や「ほっとプラス」において考え直す力の低い生徒を対象に、コミュニケーション能力向上を目的に、週1回放課後の20分間でS S T等を活用してコミュニケーショントレーニングを実施している。コミュニケーションが苦手な生徒だけでなく、得意な生徒も混ざり合うことで、異学年の生徒同士によるピア・サポートの形で行っている。また、今年度から、入学者の保護者向けに「入学前相談書」を配布し、自由記述欄を設けた。



取組の成果等

○ 成果

- ・アセスメントツールに関しては、用途別に使用し活用することができた。「hyper-Q U」の結果分析に基づき、S Cは時間をかけて生徒・保護者の困り感に対応する支援を行うとともに、必要に応じて地域の医療・支援機関等と連携することができた。
- ・P Tの校内研修では、W I S C -IVの分析方法や合理的配慮等に関して学ぶ事で、年々増加する支援を必要とする生徒への理解を学校全体で共通認識することができた。
- ・「入学前相談書」により、発達障がいや家庭内の情報を知ることで支援の機会が増えた。

○ 課題

- ・2年間の「ほっとプラス」の結果から、ストレス対処能力の向上を図った直後は、一時的に考える力が身に付くが、時間をおいてしまうと減少してしまうため、継続される取組が必要である。

○ 次年度に向けて

- ・年に数回行われる体育館HRにおいて、命の大切さだけでなく、コミュニケーション、助け合い等のテーマで行うことで、学校全体で考える力の構築に努めたい。

北海道興部高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：70名

本校の目指す生徒像

地域理解を進める広い視野と豊かな知識を持ち、地域貢献に努めるとともに、目標実現に向けて不屈の精神と健やかな身体を持つ生徒

本校の現状

おとなしく素直な生徒が多い一方で、学業や人間関係の面などで不安を抱えている生徒も見られることから、コミュニケーション能力の育成が課題である。

本校の取組の特徴

- 1 コミュニケーショントレーニングにおける外部人材の活用
- 2 集団カウンセリングにおける外部人材の活用

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1. コミュニケーショントレーニングにおける外部人材の活用

1 学年宿泊研修において、紋別生涯学習センター職員を講師として、コミュニケーショントレーニングを実施した。アイスブレイキングなどのプログラムを実施することで、生徒同士だけでなく、日常の学校生活と異なる場面で外部の方ともコミュニケーションを取る機会としている。



2. 集団カウンセリングにおける外部人材の活用

本校では、スクールカウンセラーによる「相手も自分も大切にするコミュニケーション」をテーマとした集団カウンセリングに加えて、株式会社ゆめかなの石川尚子様を講師として「夢を叶えるコーチング」をテーマとした講演会も実施した。

生徒からは、「お互いのかげがえのなさを理解できた。」「前向きに考えることの必要性を実感した。」などの感想があった。



取組の成果等

○ 成果

教員だけでなく、複数の多様な外部人材からコミュニケーションスキルトレーニングや集団カウンセリングを受けることにより、生徒が多面的なものの見方を身に付けることができた。また、自分の思いや状況を気軽に相談することができるようになり、物事を前向きに捉えていく姿勢も身に付いてきた。

また、教員もこれらの研修の成果を教育相談や進路相談において活用することにより、生徒理解の深化や支援につなげることができた。

○ 課題

取組の効果を客観的に分析して、次年度の計画を作成する必要がある。また、外部人材の活用を図るためには、関係機関との調整を図るとともに、それぞれの取組の目的についても十分協議していく必要がある。

○ 次年度に向けて

「ほっと」、「QU」等の複数の検査を活用して、多角的・客観的に生徒個人及び集団を捉え、教員の共通理解のもと、生徒を支援する。

また、外部人材の活用に関しても、効果的な時期・方法について十分協議した上で、早期に年間計画を作成する。

北海道本別高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：104名

本校の目指す生徒像

社会で自立できる生徒
(公的資質・職業観・勤労観)

本校の現状

落ち着いた学校生活を送ることができているが、コミュニケーションスキルや人間関係の構築に課題を抱える生徒も見られる。

本校の取組の特徴

1. コミュニケーションスキル向上に向けた集団カウンセリングの実施
2. スクールカウンセラーと連携した集団カウンセリングの実施

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

- ・ コミュニケーションスキル向上に向けた集団カウンセリングの実施

① 目的

相手の話をよく聞いた上で、心があたたかくなる言葉を使うなど、相談しやすい人間関係を形成する力を身に付ける。

② 対象 1 学年

③ 内容 他己紹介

自己紹介カードを作成→ペア交流→ペアを変えて交流

④ 生徒のリフレクションから (一部抜粋)

- ・ 長く一緒にいるはずなのに、相手の知らないことがたくさんあって驚いた。
- ・ 最初は話しにくいと思ったけど、意外と話しやすかった。



○ 自殺予防教育の取組

- ・ スクールカウンセラーと連携した集団カウンセリングの実施

① 目的

日常生活の中にどのようなストレスがあるのかを知るとともに、様々な解消の方法を理解する。

② 対象 1・2 学年

③ 内容 ストレスとの付き合い方、マインドフルネスの身に付け方、コーピングエクササイズ等

④ 生徒のリフレクションから (一部抜粋)

- ・ 楽観的に考えることができれば、今より気持ちが楽になると思った。
- ・ これからは失敗したことをよい経験と考えて、プラス志向にしていきたい。



取組の成果等

○ 成果

- ・ 集団カウンセリングの実施により、コミュニケーションスキルが向上し、相手を思いやる関わりが増えてきた。
- ・ hyper-Q Uの結果では、学級環境適応感、学級満足度はどの学年も比較的高い数値になった。また、スクールカウンセラーを講師に招いた「hyper-Q Uを活用した生徒理解」についての校内研修により、予防的教育相談が充実し、2回目の検査では学級満足度が更に上昇した。

○ 課題

- ・ 系統的に行っているコミュニケーションスキルの学習を、年間を通じてバランスよく実施できるようにする必要がある。
- ・ 全ての教員が指導できるよう、組織的な取組にする必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・ より生徒の実態を踏まえた取組にするため、内容や実施時期の見直しを図る。
- ・ 組織的な取組となるよう、全ての教員を対象にピア・サポートに関する校内研修を実施する。

北海道標茶高等学校

課 程：全日制
学 科：総合学科
生徒数：215名

本校の目指す生徒像

- ・主体的で協働的な探究により地域社会の発展に資する生徒。
- ・自己実現を目指すことのできる生徒。
- ・生命を尊び、多様性を認め合い、豊かな人間性を持った生徒。

本校の現状

様々な支援を要する生徒が見られる。また、精神的なストレスから体調を崩すなど、安定した学校生活に支障をきたす生徒も見られる。

本校の取組の特徴

1. スクールカウンセラーとの連携による生徒の困り感への対応及び集団カウンセリングによる生徒のストレス対処スキルの育成。
2. ピア・サポート活動や外部講師による生徒のコミュニケーションスキルの向上、自己肯定感の醸成、良好な人間関係の構築及び援助希求的態度の育成。
3. 「ほっと」及び「ほっとプラス」の活用及び教育相談による生徒の心の健康に係る早期の問題把握の促進。

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

(1) 取組のねらい

様々な支援スキル演習を通して、コミュニケーション能力の育成を図り、自分一人で解決が困難な状況に遭遇した際の対処法を学び、援助希求的態度の育成につなげる。また、互いに思いやる気持ちを育み、豊かな人間関係を構築できるようにする。

(2) 取組の対象

全年次希望者

(3) 取組の内容

スクールカウンセラーの佐々木啓子先生の協力のもと、放課後にピア・サポート活動を実施。アサーショントレーニングや傾聴、アンガーマネジメントなどのスキル演習を通して実践方法を学ぶ。

(4) 生徒の感想

- ・異性と話すことに苦手意識を持っていたが、ピア・サポート活動を通して話すことに少し慣れることができた。
- ・言葉は人を褒めるためにあると改めて気付くことができた。
- ・コミュニケーションをとる際に、話し方や聞き方次第で相手の感じ方が異なることが分かった。



取組の成果等

○ 成果

ピア・サポート活動を通してコミュニケーションスキルを学んだことにより、自分の気持ちを伝えることに困難さを抱える生徒の課題解決に役立てることができた。

○ 課題

ピア・サポート活動への参加は希望者のみであり、継続的に参加できる生徒が少ないため、全校生徒に周知し、興味・関心を持ってもらうことで参加を促していく必要がある。

○ 次年度に向けて

ピア・サポート活動を希望者のみならず、全校生徒を対象に実施する機会を設ける。

北海道弟子屈高等学校

課 程：全日制
学 科：普通科
生徒数：91名

本校の目指す生徒像

- ・郷土を愛し、たくましく生きる生徒
- ・自ら学ぶ意欲を持ち続ける生徒
- ・自他の生命を尊重し、互いに思いやり、高め合うことのできる生徒

本校の現状

気持ちが優しく素直な生徒が多い反面、自己肯定感が低く、相談が苦手な生徒、人間関係で困難さを抱えて入学する生徒が年々増えている。

本校の取組の特徴

1. スクールカウンセラーによる心の教育、集団カウンセリングの実施（各学年2時間）
2. スクールカウンセラーによる個別のカウンセリング、全教員による全校生徒を対象とした教育相談活動

取組の内容

○ 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

- ・スクールカウンセラーによる心の教育、集団カウンセリングの実施（各学年2時間）

人間関係を形成する力やコミュニケーション能力を育成するなど、生涯を通じたメンタルヘルスの基礎づくりを目的として実施した。実施後は、日常生活で生徒同士が声をかけ合う様子も見られ、「次のコミュニケーショントレーニングはいつ？」と楽しみにする生徒もいた。



○ スクールカウンセラーによる支援

- ・スクールカウンセラーによる個別のカウンセリング、全教員による全校生徒を対象とした教育相談活動

昨年度に続き、今年度も3名のSCによる支援体制を組み、生徒や保護者を対象に個別のカウンセリングを実施した。生徒の状況に応じ、実施後ケース会議を開き、サポートの方向性について話し合い、SCからの助言を受けた。また、年に2回、教員による全校面談を実施。面談を通し、生徒の学校生活の様子を把握するとともに、生徒と教員とが話をするきっかけとなり、困ったときに相談できる関係を構築することにもつなげている。

取組の成果等

○ 成果

- ・SCによる個別カウンセリングや全校面談を通し、生徒が他者へ相談することへの抵抗感が小さくなり、生徒同士又は生徒から教員に相談する機会を増やすことができた。
- ・多くの生徒がボランティア活動に参加し、活動の中で積極的にコミュニケーションをすることで、生徒が地域や社会とのつながりを実感することができた。
- ・子ども理解支援ツール「ほっと」の結果について、前年度と比べて全ての学年で、数値が全体的に上昇した。

○ 課題

- ・子ども理解支援ツール「ほっと」の結果において、「率先」、「忠告」が低い状況であることから、仲間と高め合ったり、影響力のある発言をする力などを育成する必要がある。
- ・人と関わるのが苦手な生徒、学校や家庭で悩みを抱える生徒、自己肯定感が低い生徒を把握し、コミュニケーションスキルを身に付けさせる取組を推進する必要がある。

○ 次年度に向けて

- ・自分も他者も大切にできる言動を意識できるような働きかけを今後も継続していく。

高校生ステップアップ・プログラム実施要項

(平成25年 5月17日 学校教育局長決定)

(平成28年 5月20日 一部改正)

(平成30年 4月 6日 一部改正)

(平成31年 4月19日 一部改正)

1 趣旨

高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

2 事業の実施主体

北海道教育委員会（以下「委員会」という。）は、文部科学省の委託を受けて事業を実施する。

3 事業の内容

(1) 高等学校の取組

ア 集団カウンセリングの実施

実施校は、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため、計画的に集団カウンセリングを実施する。

イ 自殺予防教育の取組の実施

実施校は、「自殺予防教育プログラム」を積極的に活用し、計画的に自殺予防教育の取組を実施する。

ウ 外部人材を活用した取組の実施

(ア) スクールカウンセラーによる支援

実施校は、生徒への集団カウンセリングやアセスメントの実施及び本事業の実施のための指導助言、教員研修等に、積極的にスクールカウンセラーを活用する。

ただし、スクールカウンセラーの活用時間数については予算の範囲内とする。

(イ) 北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム員（以下「支援チーム員」という。）の活用

実施校は、生徒指導上の諸課題の解決に向けた取組の教員研修等に、積極的に支援チーム員を活用する。

エ 成果の検証

実施校は、本プログラムの成果を、次の(ア)から(オ)の項目により検証する。

(ア) 子ども理解支援ツール「ほっと」等を用いた客観的な指標に基づく評価

実施校は、「ほっと」等による調査を複数回実施し、上記ア、イに掲げる取組の成果を検証する。

(イ) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率の変化

(ウ) その他の生徒の状況

- ・ 上記ア、イの取組における生徒の感想
- ・ 上記ア、イの取組における生徒の活動状況の観察

(エ) 外部人材の活用状況

(オ) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

オ 学校プログラム（成果のまとめ）の作成

実施校は、上記ア～エの実施状況、成果や課題を踏まえ、他校の参考となるよう、実施時期や内容、参考資料等を取りまとめた学校プログラム（成果のまとめ）を作成する。

(2) 委員会の取組

ア 運営協議会の開催

委員会は、本プログラムの円滑な実施に資するため、実施校の職員、スクールカウンセラー、所管教育局高等学校教育指導班担当指導主事等の参加を得て運営協議会を開催する。

イ 集団カウンセリング研修会の開催

委員会は、実施校における取組の充実を図るため、実施校の教員等を対象に集団カウンセリング研修会を開催する。

ウ 取組状況の広報

委員会は、全道立高等学校における不登校や中途退学の未然防止、自殺予防の取組の充実に役立てるため、本プログラムの取組状況の広報に努める。

エ 北海道教育カウンセリング I C T活用事業による支援

委員会は、スクールカウンセラーの継続的な派遣が困難な地域に対し、音声と映像の双方向情報通信技術を活用した北海道教育カウンセリング I C T活用事業により支援する。

ただし、実施校数には限りがあること。

4 事業実施に当たっての留意事項

(1) 実施校は、事業終了後においても、学校独自でプログラムを継続的に実施することを想定した計画の策定及び検証を行うこと。

(2) 実施校は、スクールカウンセラーによる予防的・開発的教育相談の手法や集団カウンセリング、アセスメントに関する教員研修を実施し、知識や手法の習得の他、本プログラムに関する教員間の共通理解を深めること。

(3) 高校1年生に重点を置いて本プログラムを実施する場合は、宿泊研修において、仲間づくり支援やコミュニケーションスキルを育成する集団カウンセリングを実施すること。

また、国立・道立青少年教育施設において宿泊研修を実施する場合は、当該施設職員と連携し、集団カウンセリングを実施すること。

(4) スクールカウンセラーによる生徒への集団カウンセリングや教員研修は貴重な機会であることから、実施校は支障のない範囲内で、近隣校と連携して実施してよいこと。

(5) スクールカウンセラーの活用については、次の事項に留意すること。

ア スクールカウンセラーの人材確保については、実施校が行うこと。ただし、必要に応じて委員会が協力すること。

イ 予防的・開発的教育相談の手法は多様であることから、必要に応じて複数のスクールカウンセラーを活用してよいこと。

ウ スクールカウンセラーの任用、報酬等の支給事務等については、「スクールカウンセラー取扱要領」（平成26年3月31日教育長一部改正）によること。

(6) 支援チーム員の派遣については、「北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム実施要項」（平成27年3月31日学校教育局長一部改正）によること。

5 実施期間

原則として1か年とする。

ただし、1年を超えて継続の希望がある場合は、取組状況や事業成果等に基づき委員会が継続を決定する。

6 事業の実施手続

(1) 事業の実施を希望する道立高等学校は、実施計画書（別記様式1）及び所要経費計画書（別記様式2）を添付し、委員会に申請する。

(2) 委員会は、上記(1)により提出された実施計画書等の内容を審査し、実施校を決定する。

(3) 実施校は、実施計画書等の内容を変更する場合は、速やかに委員会に報告し、その指示を受けること。

7 事業の報告

(1) 実施校は、実施報告書及び所要経費報告書を作成し、当該年度の2月末日までに、委員会に提出すること。

(2) 支出関係書類については、他の経費と区分して適当な帳簿を用いて整理し、使途を明らかに

するものとし、事業を実施した翌年度から5年間保存すること。

8 その他

- (1) 委員会は、必要に応じ、事業の実施状況及び経理状況等について実態調査を行うこと。
- (2) この要項に定めのないものは、委員会及び実施校が協議の上、決定すること。

附 則

この要項は、平成25年5月17日から施行する。

この要項は、平成28年5月20日から施行する。

この要項は、平成30年4月6日から施行する。

この要項は、平成31年4月19日から施行する。